

宮崎汎会員が見た世界の旅・第2部人物編第1話

マルグレーテII世女王陛下と同乗した飛行機 デンマーク

午前9時の飛行機でデンマークの首都コペンハーゲンからフィンランドのヘルシンキへ向かう予定がひどい濃霧のため、全便飛行できず空港は大混雑である。待つこと久しく午後15:30ごろ唐突に搭乗する予定の便のチェックインを開始するとのアナウンスがあった。

勇躍手続きを済ませ座席に落ち着きほっとするが、なおも満席の機内で30分ほども待機する。座った席は前から5番目だが、その前の席は空席で誰もいない。しばらくすると麗々しく軍服を着た軍人など7~8名の男女のグループが、どやどやと乗り込んできた。同時に機はエプロンを離れ滑走し直ちに離陸した。

機内食が配られる。空港では混雑のため昼食どころでなく早速食事をとった。この座席から前には一人の大柄な女性が座しているだけで彼女も食事をしている。通路を挟んで座している軍人たちはワインを飲みながら互いにひそひそ会話をしている。そうこうしているうちに夕暮れ迫るヘルシンキ空港に到着した。機が停止したので荷物を取ろうと立ち上がると大柄なフライトアテンダントが小走りにやってきてそっと肩を抑え、まだ座っていてくれとのこと。

目の前の座席の女性が立ち上がり帽子を直している、見詰める視線を感じたのか目が合うとにっこり笑ったので微笑み返した。コペンハーゲンで最後に乗り込んできた一団が全員去って行った。機内は急にざわめきにぎやかになった。

ふと機内の窓からみると、目の下に敷き詰められた赤い絨毯の上をTVのライトを浴びながら、彼の女性を先頭に一団が歩いていく。



テレビのライトを浴びるマグルレーテ女王陛下一行

フライトアテンダントが荷物をとってくれ、「お待たせしました」とにっこり微笑みかける。「今の方たちはVIPですか？」と尋ねた。彼女はびっくりして「ご存じないのですか？あの方はデンマークのマグルレーテ2世女王陛下です」と告げた。偶然乗り合わせ、同じ機内食を食べ、目が合っ
てほほえみながら去っていった方が女王陛下であったのだ。忘れることのできない旅の思い出である。